

陝西師範大学

平成21年10月20日から24日までの5日間、本校の2年生約80名が開校以来初めて修学旅行で中国を訪問した。新型インフルエンザの流行で、研修旅行そのものが危ぶまれたが、全員予定どおり出発し、無事に帰国することができた。

中国研修旅行の発案は、前任校で、小泉元首相が提案した「日中21世紀交流事業」に基づき、中国の高校生交流団を受け入れた体験に起因している。初めて来日した高校生を体育祭に参加させ、通常の数学、理科、美術の授業を英語で行い、生徒の家にホームステイしてもらった。緊張していた中国の高校生達も各家庭では英語と漢字で筆談しながら交流を深め、新しい友情を育んだ。別れの際の涙の抱擁は特に感動的で、ホームステイ先での親交の深さを感じられ、国際理解にはまず出会いから始めなければならないとつくづく実感させられた。



陝西師範大学生と記念写真

今回、訪問先に陝西師範大学を選んだのは、一つには本校の高校生が全く中国語を話せないため、コミュニケーションを深めるには日本語を話せる大学生が必要だったからである。たまたま3年前に陝西省西安市で開催された日中韓の研修旅行シンポジウムに参加し、そこで陝西師範大学で日本語教育に携わっている藤田洋三先生にお会いした。先生は京都府立学校の元校長で、我々の大先輩にあたる。御退職後中国で暮らしながら、中国人学生の日本語教育に喜々として携わっている姿に大変感銘を受けた。その時の談笑の中から陝西師範大学生との交流の話が持ち上がったのである。

また、西安市は昔の長安の都である。特に、京都で暮らす我々にとって長安の都は平安京のモデルであり、京都府と陝西省は友好交流の提携を結んでおり、興味深い。秦の始皇帝陵や兵馬俑など多くの歴史的遺産を有し、近くには三国志の舞台が点在している。長安の城壁を見上げると、遣唐使が感じたであろう憧れの念を抱く。

一方、北京は万里の長城や紫禁城等の多くの世界文化遺産を有するが、近年急速に発展する中国最大の都市であり、二つの都市を訪問することは、ちょうど中国の古代史と現代史を直接垣間見るようなものである。



兵馬俑

中国旅行を企画したときは、ちょうど中国のチベット問題や少数民族に対する人権問題の報道が大きく取り上げられ、保護者や生徒の中には中国への修学旅行に消極的な雰囲気があったし、語学学習の観点から英語圏へ行くべきとの御意見もいただいた。ただ修学旅行を通じて何を学ばせるのか。本校の教育目標である「共助」の精神やグローバル社会におけるこれからの人材像を考えると、日本との関係が特に深い歴史文化を有する中国は、国際理解教育を進める上で外せない国であった。安堵したのは、華やかな北京オリンピックの報道や中国研修の意義等が正しく伝わるにつれ、生徒

・保護者の中に理解の輪が広がったことである。特に具体的に動き出せたのは、本校の勤務経験があり、京都府から西安外国語学院に1年間派遣されていたN先生を迎えることができたからである。

N先生を中心に学年団を組織し、事前授業として、社会科で唐時代と近現代史を学習し、地元企業からは福建省での工場立ち上げに苦労されたKTCの元工場長に講演に来ていただいた。



万里の長城

また、西安市出身の留学生（京都府の名誉友好大使）を招聘して日本と中国に関する講演をしてもらった。

さらに本校の創立30周年記念事業として世界55、000キロを自転車走破した坂本達氏の講演会を開催し、国際感覚を醸成する取組みを行った。私も限りある時間の中で地球環境問題について講義をさせてもらった。

こうした事前の取組みを積んだ上で、中国で勤勉な陝西師範大学生と交流し、兵馬俑や万里の長城など貴重な人類の文化遺産に触れる研修旅行を成功裡に終えることができた。

師範大学の学生達からも、日本語の現地研修になったほか、現在の日本の若者の価値観に驚きを隠せなかったというお便りもいただいている。本校の生徒達の感想は言うまでもない。すべてが初体験であり、すべてが驚きの連続であり、中国の歴史性と発展性に大きなインパクトを受けていたようである。特に、高い志を持って真剣に勉強する学生の姿に尊敬の念を感じた人が多かったように見受けられた。

海外研修は初めてのことばかりで、関係者の苦労は計り知れないものがあった。便宜を図っていただいた陝西師範大学の張樺学部長はじめとする大学関係者の皆さん、引率団の先生方、特に保護者に安心してもらえるように、逐一学校のホームページに動向を掲載していただいた影の功労者の方々には深く感謝申し上げたい。こうした多くの人に支えられて中国研修旅行は無事に終えられたと思っている。

来年度以降も陝西師範大学との交流は重ねていきたいと考えている。百聞は一見に如かず。こうした貴重な国際交流体験を通して、真の国際人が本校から陸続と育ち、未来を担っていくことを心から願っている。

以下 歓迎式典での私のあいさつを載せておく。



天壇公園

陝西師範大学でのあいさつ

本日は、偉大な中国の教育機関の一つである陝西師範大学の李学院長様、張学部長様はじめ多くの尊敬する教職員並びに真剣に学習する学生達の御参加をいただき、このように日本の高校生のために教育交流の場を与えていただいたことに大変感動しており、また深く感謝申し上げます。

日中関係は一衣帯水といえます。帯のように細長く狭い日本海を隔てた隣国であるという意味ですが、それ以上に大切なのは、日本が古来から中国の文化を吸収し、模倣する中で、改良し日本独自の文化の華を創造してきたことです。いわば、中国は日本文化の原点の国だということです。

日常使う、日本語もそうですが、今や世界で唯一生き残っている漢字文化の国は日本と中国です。日本の国語の時間では、漢詩は必須であり、漢詩の世界は日本人の心でもあります。また、書においては、王羲之は日本でも書聖として広く尊敬されています。書物においては、司馬遷の史記や三国志演義、西遊記等は今も青年の必読の書とされており、高校生の中で愛読している生徒もいます。本屋に行けば、金庸氏の武侠小説が並んでいます。

中国近代史に偉大な足跡を残した孫文、魯迅、周恩来等は日本に留学し多くを学ばれましたが、日本もまたこうした偉人達から多くの影響を受けました。私たちの年代でも、京都嵐山にある周恩来の*「雨中嵐山」の歌碑を見ると、青年周恩来の苦衷孤忠の心に思いを馳せ、いまだに胸を打たれるものがあります。

現代っ子達は、むしろ映画監督張藝謀氏の作品「初恋の来た道」や「HERO」など、最近では呉宇森監督の「レッド・クリフ」に中国を見るかもしれません。

今回訪れた西安市は古来随・唐の都「長安」として、私たちは、学校で世界史の時間に学びます。特に、私たちの住む京都は、長安の都を模倣してできた千年の古都であり縁は特に深いものがあります。長安は、千年前には遣唐使や仏教僧が教えを学びに行ったあこがれの都であり、当時は長安を見ずして、文化を語るできませんでした。

例えば、長く日本の仏教界を二分していた宗教に天台、真言の二宗があります。天台宗は最澄、真言宗は空海が日本における創始者です。同じ船に乗って入唐を果たしたのですが、最澄は直ぐに天台山に登り天台宗を学んで帰国し、長安の都には行っていません。空海は長安で真言を修めます。この世界的都の長安を見なかったことが、後に天台、真言の優劣を競ったときに、教義とは別に最澄の最大の欠陥になります。君は長安の都、つまり世界を見てないではないかということです。この長安の高い城壁を昔の遣唐使は涙を流して仰ぎ見たことでしょう。その風景を思うと私には胸に迫るものがあります。

今回、私たちは、現在驚異的な発展を続ける中国の首都である北京と、そして中国三千年の古都である西安を見学します。昔の世界史と現在の世界史を見に行くようなものです。

今回の中国研修旅行で、兵馬俑はじめ数々の世界文化遺産をしっかりと見学するとともに、学生達には歴史の中に大きな世界観を養い、グローバルな視点で物事を考えることを学ばせたいと願っています。現在の日本の若者達は、儒教的礼節を知りません。また個における価値観の多様化により様々な考え方を容認され育っています。知らないゆえに、失礼な振る舞いや行動があるかもしれません、どうか寛大なお心でお許しをいただきたいと思えます。本日真剣に学習する優秀な陝西師範大学の学生と交流を深め、未来に繋がる友誼を

つくって欲しいと願っています。簡単ですが、以上でごあいさつとさせていただきます。
また、本日の感謝の心を込めて、師範大学に京人形をお贈りさせていただきたいと思いま
す。ありがとうございました。

* 雨中嵐山

雨中二次遊嵐山、
兩岸蒼松、
夾着幾株櫻。
到盡處突見一山高、
流出泉水綠如許、
繞石照人。
瀟瀟雨、
霧蒙濃、
一綫陽光穿雲出、
愈見嬌妍。